おしろい花

池松　孝子

子供が幼稚園に通っていた頃のこと、夏服を洗濯した。脱水の済んだ服を取り出すと、パラパラと音がして洗濯機の中に小さな黒い豆のような物が散らばった。おしろい花の種であった。それを見て、その日の子供達の行動範囲を想像し、いじらしく思ったものだ。

おしろい花が咲いて子供が育つ露地　　菖蒲　あや

おしろい花は密集して生えているので交配しやすい。赤、ピンク、白、黄色のほかに絞りや染め分けもあり、一枝から異なった色の花もつける。夕方から翌朝十時頃まで咲く。種の硬い皮をつぶすと真っ白な胚乳が出てくる。おしろい花という名の所以である。

小学生の頃には、花の汁を爪にこすりつけてマニキュアにしたり、めしべを引っ張ってパラシュートを作ったりして遊んだ。後に知ったことだが、草全体、特に根や種には毒素があって、誤って口に入れると嘔吐、下痢などの中毒症状をおこすという。子供の頃の遊びには少なからず危険がつきまとっていたのか。

私の小学校四年生の担任は、色々な活動に意欲的に指導して下さる熱心な先生であった。その先生の親友が、近くの小学校四年生を担任していたことから、双方の四年生同士の交流が始まった。それぞれの生徒が、文通する相手と作文、絵画、手紙などの交換をした。何か月か後、向こうの小学校のクラス全員を私達の小学校に招待した。私の文通相手はどんな人だろうとわくわくしながらその日を迎えた。その時、小さなプレゼントを交換した。私がもらったのはおしろい花の種だった。

それから十年近くたって、大学で同じサークルにいた友人が、その時の私の文通相手であったという奇遇もあった。

九十歳を超えてなお、元気に合唱団の指揮などで活躍されているその恩師とは、今も交流がある。一昨年、パリを中心に活躍する息子さんのピアノコンサートでお会いし、このことが話題になった。小学校の先生という仕事は、半世紀を超えても心に残る素晴らしい仕事なのだと。